北大武山東面　太麻里渓・北大武東渓（初登）

日時:1992 年 12 月 25 日～1月 3 日

メンバー:高岸且、他7名

概要:太麻里渓は、台湾五岳の北大武山(3090m)東面の水を集める大渓谷である。この谷へは大阪わらじの会と台湾との合同隊が、87 年 12 月、91 年 1 月の 2 回の溯渓（＝沢登り）を試みるが敗退させられている。今回は、この谷の本流というべき北大武東渓（命名）を詰めて北大武山（3090m）の頂を目指し、初踏査に成功した。亜熱帯性のジャングルから氷の張る山頂まで、幾度かの高巻き、スズメバチの襲撃、巨大な天然ヒノキとの遭遇など台湾の大渓谷ならでの溯渓であった。高岸は、大阪わらじの会の会員として参加した。

記録

12 月 25 日　晴

太麻里駅（14:30）－林道終点－標高　200mBP（BivouacPlat:以下同じ）1（16:00）

　太麻里駅から太麻里渓の下流部の林道終点までタクシーにて約 40 分で着く。幅 300m 程度の緩い流れの広い川原にフライシートを張る。台湾メンバーが大量に持参してくれた豚サラミと生ニンニク、そして焚き火が毎晩の友となる。

12 月 26 日（1 日目）　晴

BP1（8:00）－BP2 包盛社跡 460m（16:00）

　広い大河原が続く。第 1 のゴルジュの手前で、狩猟用の弓をもった台湾先住民（高砂族・高山族）の猟師に出会う。「羌」というシカ科の動物は、日本語で「きょん」と呼ばれる。ルートファインディングは「きょんの道」探しでもある。

ゴルジュ中央の切り立った壁、高砂族猟師の仮設梯子に助けられ右岸から越える。87 年には越えることができなかった淵は、堆砂で淵が浅くなっていたため 30m 水泳で突破した。

　南大武東渓の出合付近は魚影が濃い、コイ科の「苦花魚（クーファーユー）」が群れをなして泳いでいる。8 匹の釣果である。旧高砂族部落跡の包盛社跡の近くをサイトとする。

12 月 27 日（2 日目）　曇のち晴

BP2（8:00）－北大武東渓出合（500m）－BP3（16:00）

　両岸が迫ったゴーロ帯の本流を詰め、右から包盛渓が出合う。包盛社跡から 3 時間で北大武東渓の入口に着く。入口からゴルジュと連瀑であり、右の尾根から高巻く。途中、虎頭蜂（スズメバチの一種）の襲撃に会い、右手を刺され、グローブのように手が腫れ上がる。再来の恐怖に怯えるも気を落ち着けて沢に降り立つ。

　10m の淵を泳ぎ 10m 滝を左岸フィックス工作で突破する。その上は大岩のゴーロをボルダーリングで高度を稼ぐ。15m 垂直の滝に阻まれ BP サイトとする。

12 月 28 日（3 日目）　曇のち雨

BP3（8:00）－1250m BP4（18:00）

　滝の左岸から高巻きに入る。途中、10m 懸垂で支流に降りるが、深いゴルジュの本流まで下降できず、再度ジャングルのようなブッシュ帯の高巻き 6 時間で本流に戻る。神秘的な淵をもつチムニー状の滝を左岸から高巻くが、日暮れとなりブッシュの中でビバークとなる。夜に雨が降りフライで水を集め水分を補給する。

12 月 29 日（4 日目）　晴

BP4（8:00）－BP5（16:00）

　ブッシュをトラバースして本流に沿って進む。下降点を探り幾度も下降を試みるがゴルジュが深い。支尾根から本流に降りることができた。1 日半の高巻きであった。

12 月 30 日　（5 日目）　曇り

BP5(8:00)-BP6(16:00?)

　右岸から高巻きに入り、2 ピッチの懸垂下降で本流へ淵を泳ぎ、ボルダーを越え、支流を左に分け、大支流（右俣）を超えると水量は半減した。本流の中俣に入る。10m 程度の滝が連続している。右へ、

左への高巻きをこなす。

12 月 31 日(6 日目) 晴

BP6(8:00)－大滝の上 1900mBP7(16:00)

出発 10 分で 40m 大滝に出合う。一部フィックスを張りながら、右岸を高巻きする。下降中に渓谷最大の 2 段 100mの大滝が現れ、さらに高巻きを強いられる。

1 月 1 日(7 日目) 晴

BP7(8:00?)－BP8(16:00？)

岩溝状の連続した滝のため右岸の高巻きとなる。幾度か谷への下降を試みるがゴルジュが深く断念する。一度支尾根まで上がり高度を稼ぎ、標高 2550mから谷中へ下降する。最奥の二俣で溯渓の終了点とする。2000m 付近には胸高直径が20m 程度の巨大なヒノキがいくつか確認できた。

1 月 2 日(8 日目) 晴

BP8(8:00)－主稜線(11:40)－北大武山－桧谷山荘

右の斜面にとりつき、猟師の小屋を見つける。その足跡をたどり稜線を目指す。昼前に主稜線に飛び出し、北大武山(3090m)の山頂に立つ。

登山道を一気に駆け下り檜谷山荘で宿泊する。

1 月 3 日 晴

林道を下っている途中で、台湾の登山協会のお迎えの車と合流する。その日の夕方に車と電車で台北まで移動する。

台北では祝賀パーティが準備されて、新聞社の取材を受ける。台北の夜は歓喜と共に、長くて深いアルコールゴルジュで暮れた。

(記／高岸)

標高 2000m 付近で強大なヒノキとの遭遇

6 戶外活動　民生報

中日聯手溯溪傳捷

溯行太麻里溪攀登北大武山 歷經八天攻頂成功

記者 黃鄉雄／報導

●有志者事竟成，第三次組隊溯行太麻里溪攀登北大武山的中、日兩國溯溪活動同好，經過八天奮鬥，終於在本月25日完成這個延宕已久的目標。

無三不成禮的太麻里溪聯合溯行隊，日本隊有大阪草柱會茂木宪治、清水裕、高岸且、成瀨陽一、松原憲泰等五人來訪，我國隊有台北溯溪俱樂部吳龍揚、鄧松霖與彰化溯溪俱樂部侯國勝等三人參加。他們是上個月25日從台東縣太麻里鄉入山，當天就住在嘉蘭村外的溪畔。26日起開始沿溪床上溯，由於多次山洪衝擊，北老山南麓的峽谷深窄已變得比前兩次容易溯行，這天就一直推進到包盛社舊址。

第二天溯行到密老老山西側的分流口，途中高岸且的右手掌曾遭虎頭蜂叮得腫起來，幸無大礙。第三天進入北大武山東麓的峽谷區，落差大、瀑布多，有不少次繞山腰轉進。第四天遇到困難地形，高繞山腰再降回溪谷，整天只前進約一公里的水平距離。第五天和第六天則是在更困難的地形裏奮鬥，有許多峭壁峽谷，有一段垂降達兩個繩距，不過在幾次高繞途中都有設法下切接近觀察溪谷的狀況，以免像前兩次那樣留下太多的不明情形。

在源流區歷經千辛萬苦之後，第七天終於脫離峽谷的糾纏，上升到水量較少的最後分流點。第八天再從標高約2400公尺的分流點衝到北大武山的主稜，登上高度3090公尺的山頂，並循寶山步道越過中央山脈下到西麓的檜谷山莊。前天才下山，深夜返回台北。

茂木宪治說，太麻里溪溯行終獲成功，前兩次失敗的經驗仍有許多參考價值，這次溯行期間天氣良好，只有一天下雨，隊員間合作順利，技術性，都是成功的因素，高雄市登山會與彰化山協岳友在溯溪隊伍上山及下山時的協助接應，也是令人難忘的友誼，至於下回再來的溯行目標，有可能是溯楚濃溪登玉山，將在回到日本與同好細研究之後再決定，因為台灣有許多高困難度的大溪谷相當引人入勝。

➡溯行太麻里溪要有高級溯行技術才能通過深潭與瀑布的困難地形。

吳龍揚／攝影

⬇太麻里溪上游多峽谷瀑布地形。 吳龍揚／攝影

別讓你的"牠"嗚呼哀哉！

預防感冒 治療寄生蟲要加把勁

記者 朱家瑩／報導

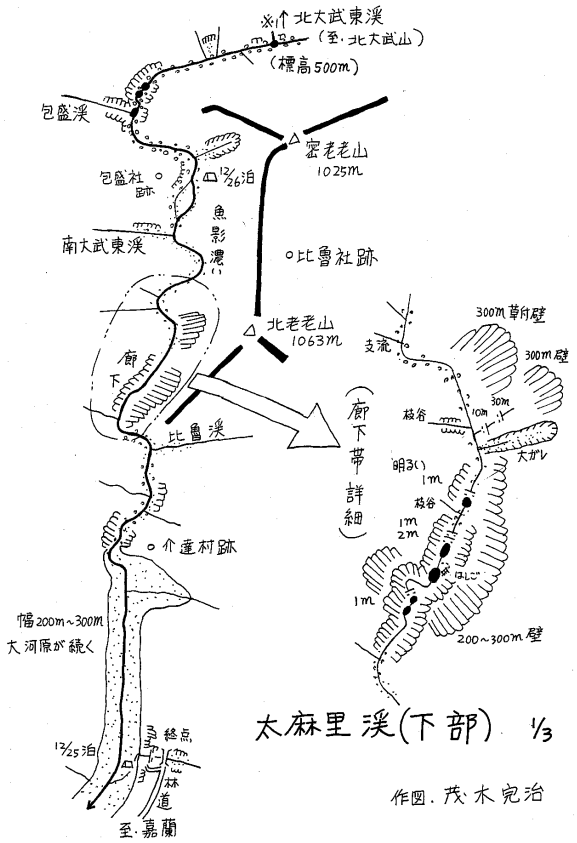
●寒流來襲，家中飼有靈長類寵物的飼主可要小心了！最近不少獸醫都接到靈長類感冒求醫的案例，其中甚至有一隻馬來猴因受涼延遲送醫而死亡，經解剖後還發現腸道有大量的蠕蟲寄生，這種人畜共通的寄生蟲，已成為飼養靈長類家庭健康的隱憂。

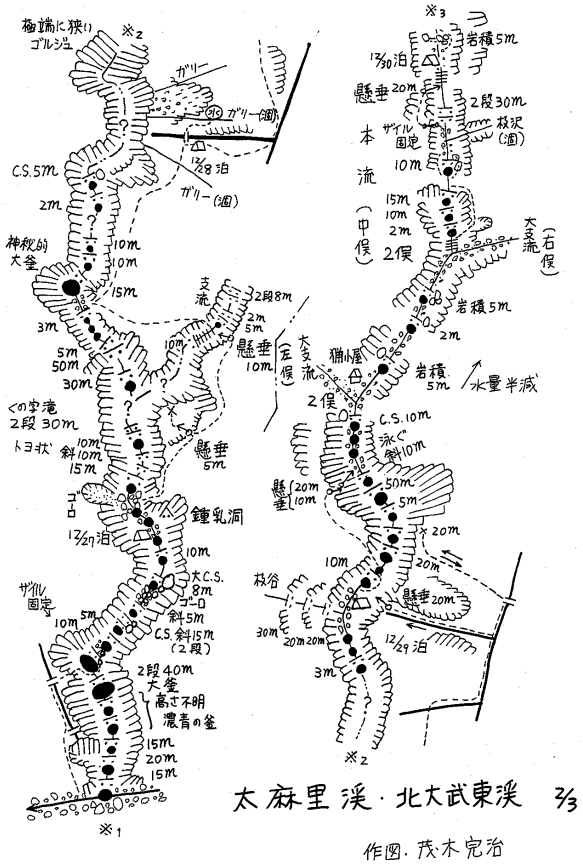
這隻日前因感冒送醫的馬來猴，在送到醫院時已有心肺衰竭的現象，因體力虛弱，經急救後仍不幸死亡。後來獸醫師在將牠解剖做病理檢查時赫然發現牠的腸道被大量蠕蟲寄生，以致腸道阻塞，營養無法吸收，自然體力不足以抵抗病菌的侵襲。

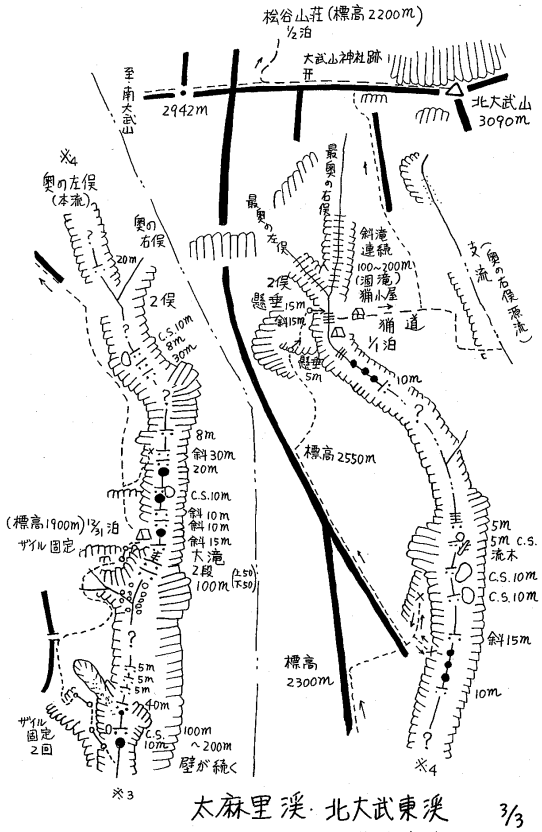
國內一名接觸靈長類經驗豐富的獸醫師指出，馬來猴、人猿等國內飼養普遍的靈長類，大部分都是生長在熱帶地區的動物，經不起寒流的衝擊，所以在目前這種天氣下，除了注意保暖，一有感冒也應立即就醫以免因延誤送醫而加重病情。另外，像這隻馬來猴體內的蠕蟲，其實在很多靈長類體內都會寄生，而且很容易就可以傳染給人類，飼養這些寵物的家庭應特別注意「人畜共通傳染」的可能性，盡可能加以預防，最好做一下寄生蟲的檢查，以免被感染而不自知。

93 年 1 月 5 日付の台湾民生報 写真は 10m の淵と 10m 滝左岸フィックス工作(12/27)

登山・登攀の記録







HP「台灣高山行」から引用